

●発行日：2018年11月17日（土）

〒661-0035 兵庫県尼崎市武庫之荘3-19-3 TEL 06-4962-5876 FAX 06-4962-5877 e-mail info@gakurin.co.jp

発行:教材出版 学林舎



2018年学習の行き先 小学校の漢字指導について考える

「かん字を家ていで学しゅうします。」

この一文が年度末の時点で書かれたものだとすると、小学何年生が書いた文ということになるでしょうか。この問いについて、小学校低学年の児童に国語を教えている方は、すんなりと答えられるかもしれません。即答できる方は、「小学2年生」と答えるのではないのでしょうか。それは、この一文において漢字で表記されている「字」「学」が小学1年生、「家」が小学2年生で学習する漢字であり、一方、「かん字」の「漢」や「家てい」の「庭」、「学しゅう」の「習」といった小学3年生で学習する漢字がひらがなで表記されているからです。

これは、文部科学省が発表している「学年別漢字配当表」にもとづくものです。この「学年別漢字配当表」について、「学習指導要領」の小学2年生の「各学年の目標及び内容」では次のように書かれています。

第2学年においては、学年別漢字配当表の第2学年までに配当されている漢字を読むこと。また、第1学年に配当されている漢字を書き、文や文章の中で使うとともに、第2学年に配当されている漢字を漸次書き、文や文章の中で使うこと。

つまり、年度末の時点では当該学年で学習する漢字を書けるようになっておきましょう、ということです。学年に応じた学習内容という点では、この目標自体は自然なものだといえます。

しかし、これにこだわりすぎて漢字学習の本分を見失っている指導者もいるように見受けられます。上記

の例文でいえば、小学2年生に対して、「漢」は学習していないのだから「漢字」と書いてはいけません、というような指導です。

学習していない漢字を書くことは、確かに「目標」からは外れます。しかし、だからといって児童が自ら漢字を学習するのを抑制することに意義はありません。小学校の6年間を通して、児童は「教育漢字」を一通り学習します。社会生活において漢字の読み書きが必要とされるなかで、児童は「教育漢字」の読み書きの知識を小学生のうちに獲得していきます。そうして社会の中で生きていくための能力を身につけるわけです。中には、学校で学習していなくても自発的に漢字を学習しようとする児童や、生活の中で目にする機会が多い漢字を自然に読み書きできるようになる児童もいるでしょう。

漢字を覚えることは、漢字の意味を覚えること、ひいては言葉の意味を覚えることにもつながります。つまり、漢字の学習は語彙力の育成にも大きく寄与するのです。それは、児童が社会の中で生活していけるようになるための大きな一歩です。

社会生活で読み書きできるようになるべき漢字を生活の中で覚えていくというのは、漢字指導においては理想的な学習ともいえることです。それが指導者によって抑制されるというのでは、指導どころか学習者の足を引っ張ることにしかありません。

指導者からの働きかけについては、学習指導要領の「指導計画の作成と内容の取扱い」で次のように言及されています。

当該学年より後の学年に配当されている漢字及びそれ以外の漢字については、振り仮名を付けるなど、児童の学習負担に配慮しつつ提示することができること。

「児童の学習負担に配慮しつつ」とはありますが、それは学習していない漢字の使用を止めるということではありません。指導者からの働きかけとして児童に対して示す目標は、学習指導要領にあるとおり、学習

したものを書けるようになっていくという前提で考えればよいということです。

それでも児童が学習していない漢字を書こうとしているとき、つまり、できないことをできるようになるうとしているときは、指導者が児童を支え、正確な漢字知識の獲得へと導いてあげることが肝要です。

(文／学林舎編集部)

2018年学習の行き先 宿題について考える

昨今、夏休みの宿題代行業者への依頼が増加しており、社会問題となっています。このことについて、宿題の存在意義についてまで議論が進展しています。

今夏には、インターネット上のフリーマーケットサイトやオークションサイトで自由研究や読書感想文などの宿題の完成品が出品されている事態を受け、文部科学省がそれらの運営会社数社と、宿題代行の売買禁止などを盛り込んだ合意文書を公表しました。この合意文書に盛り込まれた内容は、大きく次の3つです。

- ・宿題代行に関する役務提供に加え、宿題の完成品の売買についても禁止すること。
- ・宿題代行に関する出品は、速やかに削除すること。
- ・各学校が家庭と連携し、自分で宿題に取り組むことの大切さを周知すること。

つまり、文部科学省としては、宿題は自力で取り組むことが大切であり、宿題の役務代行や完成品の売買は原則認めない、としているということです。

それでは、なぜ宿題はしなくてはいけないのでしょうか。宿題の意義として一般的にいわれるのは、「反復練習における学習内容の定着」、「家庭での学習習慣をつける」ことの2点です。

宿題として多く出されるものの中に、漢字練習、計算練習があります。これには、授業で身につけた方法を授業以外の時間に「反復練習」をすることで身につかせようというねらいがあります。

また、「宿題を出されないと家で何を勉強したらいい

かわからない。」という声もありますが、家庭学習において、やるべき内容を宿題が示していると考えることができます。

しかしその一方で、「宿題は本当に必要なのか。」という懐疑的な意見も少なからず存在します。宿題に関するある研究では、小学生が宿題をやることと成績向上に関連性は見つからず、中学生でも宿題が成績を向上させたというデータを得ることは少ない、とする結果も公表されています。（この研究では、宿題によって得られる利益は年齢に依存しており、高校生になると、宿題で学術的な利益を得られるようになってしています。）

宿題と成績の関連についてはさらなる研究を待つ必要がありますが、それでも、家庭で宿題をすることの意義は失われたいと考えられます。それは、先に述べた通り、宿題のねらいは成績を上げることだけではないからです。特に夏休みの宿題については、家庭での学習習慣をつけること（「望ましい生活習慣の形成」）が大きな目的の1つとなっています。

例えば、夏休みの宿題を代行業者に委託した場合、そのことから子どもは何を学ぶのでしょうか。「お金を払えば解決できる。」、「親がなんとかしてくれる。」、「真面目にやることに意味はない。」といった、成長する上でネガティブなことを学んでしまうのではないのでしょうか。宿題を代行業者に委託してしまうことで、子どもの成長に大きな弊害を生んでしまいかねないのです。（場合によっては、代行業者に委託しなくとも、夏休みが終わる直前に親に手伝ってもらいながら宿題を終わらせるということもあるかもしれませんが、それでも、「計画の大切さ」、「先延ばししたことへの反省」、「最後には自力で解決しなくてはいけないということ」など、子どもが学ぶことは大いにあるといえます。）たしかに宿題は、子どもへのプレッシャー、親への負担を増長させる存在となりかねませんが、だからといって、宿題はやらなくていい、代行業者にお願いしてもよいという論法にはなりえません。子どもが自ら計画性を持ち、家庭において学習を進める重要性に意義を見出さなくてはいけないのではないのでしょうか。

しかしその一方で、宿題が親子のストレスの原因となっているという多くのケースも、看過できない事態となっています。このことは、子どもの学習のペース

などを無視した画一的な内容が宿題として出されることが、原因の1つといえます。学校側、つまり宿題を出す先生が宿題の内容について検討し、子ども1人1人が達成感を味わえるように工夫をすることが大切であるといえます。(文/学林舎編集部)

2018年教育の行き先 中学校英語「話すこと」調査

平成31年4月18日に実施予定の全国学力・学習状況調査(全国学力テスト)の中学校3年生対象の英語では、「聞くこと」「読むこと」「書くこと」「話すこと」を問う問題が出されます。今回はこの「話すこと」調査について紹介します。

【実施方法】

文部科学省が平成30年10月に発表した内容によると、「話すこと」調査の所要時間は生徒1人あたり10～15分程度(準備時間5～10分程度を含む)の予定です。実施方法としては、各生徒がマイク付ヘッドフォンを使い、PCやタブレット上の指示に従い発話します。その発話内容を録音し、データ回収、採点といった流れになるようです。

【平成30年度予備調査について】

平成30年5月に実施された予備調査の「話すこと」では、3大問が出題されました。大問1では、絵や動画についての英語の質問を聞き、それに英語で答える問題です。解答時間は10秒です。大問2では、自分を含めた3人で話しているという設定のもと、自分以外の2人の会話を英語で聞き、その内容に関する質問に英語で答える問題です。ここでの解答時間は20秒です。大問3では、指定されたテーマについて英語で説明するという内容です。考える時間は1分で、解答時間は30秒です。

【平成30年度予備調査から見る、必要とされる力】

英語で話す力が問われていることはもちろん、英語を聞き取り、理解する力や基礎的な英語の語法力・語彙力なども必要とされます。

大問1はシンプルな内容ですが、10秒という短い制

限時間内で、絵や動画から質問についての情報を読み取り、英語で答えなければなりません。反射的に状況を読み取り、的確に英語で答える力が求められます。大問2は会話の内容を理解する「聞く力」に加えて、「コミュニケーション力」も必要とされます。会話は30秒程度と少し長く、一度しか聞けないので、集中して英語を聞き取らなければなりません。聞き取った内容と絵に書かれたヒントをもとに相手に伝えたい内容をまとめ、20秒以内で答える必要があります。

大問3はテーマに沿った内容を1分間でまとめ、30秒以内で「英語で伝える」ことが求められます。テーマに沿ったまとまりのある内容を考えなければなりません。また解答時間が30秒と一見短いように感じますが、実際はそれより長く感じます。4～6文程度の英文で答えることが求められます。

【平成31年度「話すこと」調査に向けて】

身近な話題について聞いたり読んだりして、自分なりに考えをまとめ、英語で相手に伝える練習をするとよいでしょう。ただし、自分なりに考えをまとめるといったことが苦手な場合は、まず、日本語でまとめる力をつける必要があります。日ごろから、自分の意見や考えをまとめる練習をしましょう。その上で、英語でどう表現したらよいかを考える習慣をつけましょう。シンプルな英文で考え、伝えることができれば十分テストに対応できるでしょう。また、予備調査からわかるように、解答時間に制限が設けられていたり、絵や動画を見て、反射的に英語を話したりすることが求められています。制限時間を意識して焦ってしまい、うまく解答できないことも考えられますので、テストの形式に慣れておくことも重要です。もちろん、英語で話している内容が理解できなければ問題に答えることができません。リスニング力の向上にも努めましょう。次回の「話すこと」調査では、予備調査から修正された内容が実施されると考えられます。英語力だけでなくまとめる力も高めてのぞみましょう。

(文/学林舎編集部)



クロスロード crossroad

第 87 回 文／吉田 良治

● スポーツの在り方を考える

東京五輪・パラリンピックまであと2年を切りました。来年は日本でラグビーのワールドカップも開催されます。世界的な競技大会が続いていく中、今年は日本のスポーツ界、特にトップレベルのアスリートや指導者、そして運営する競技団体や大学の幹部による不正なども多く発生しました。スポーツ庁では大学スポーツを統括する団体、所謂“日本版NCAA”の創設に向け設立準備委員会を設置し、15の専門部会が環境整備の議論を行っています。10月22日の会合では正式名称“大学スポーツ協会（UNIVAS）”となり、来年度“UNIVAS”の本格稼働を目指しています。私は学業充実・学習機会確保の部会に参加し、学生アスリートがスポーツ活動で学業をおろそかにしないための環境整備を行っています。

日本ではスポーツだけしていれば、高校や大学受験、そして就職でも有利とされ、学業をおろそかにしてきた歴史があります。この学業軽視・スポーツ偏重の文化が、今日本中で起こっているスポーツ界の不祥事の温床となっていると感じます。まずスポーツ界はそこで活動するアスリート、指導者、そして運営に携わるすべてのもの全てが、社会の模範となる人材、国を背負って立つ人材の輩出を第一に考え、スポーツの役割、スポーツをする価値の創造につながる取り組みを実践することが求められます。

UNIVAS設立においてもっとも大きな課題の一つは、不祥事などコンプライアンス対応で、今年数多く発生したスポーツ界の不祥事対策は、ある意味最大の懸案となっています。今年5月のゴールデンウィーク終盤、アメリカンフットボールの伝統の一戦、関西学院

大学と日本大学の定期戦で起こった危険タックル問題は、今年スポーツ界で起こった問題で最も影響が大きかった1つです。チームは秋の公式戦出場停止の処分を受け、指導者を一新してチーム再建を行っています。6月にチームよりご依頼をいただき、スポーツマンシップセミナーを提供しました。そのご縁もあり10月よりチームプログラムをサポートさせていただいています。ベースはアメリカの大学スポーツで盛んに取り組まれているアスリートプログラムをもとに、ライフスキルやスポーツマンシップを実践することを主に構成しています。この取り組みが単にチーム再建にとどまらず、UNIVASや日本のスポーツの先行事例となればと願います。

日本アメリカンフットボール協会（Jafa）では、日本大学アメリカンフットボール部の問題を受け、フェアプレイ推進委員会が立ち上がり、再発防止とフェアプレイの2つのワーキンググループが活動をしています。私はこの2つのワーキンググループに参加し、全国の大学アメリカンフットボールの関係者と議論を重ね、日本の大学アメリカンフットボール界からフェアプレイとスポーツマンシップの文化創造を目指しています。

スポーツで起こった問題は、スポーツに関わるものが当事者意識をもって取り組むことが重要となります。2020年東京五輪・パラリンピック開催の際、日本のスポーツ界は世界にどのような価値を示すのか？それがメダルの数しかなければ、不祥事の連鎖は止まることはありません。（つづく）

吉田良治さんプロフィール

1962年生まれ。1998年にワシントン大学へアメリカンフットボールコーチ留学。2000年リーグ制覇、2001年ローズボウルに出場し、ローズボウル制覇に貢献。国家レベルのリーダーシップ教育に貢献した、ランブライト元ワシントン大学ヘッドコーチよりリーダーシップ教育を学ぶ。全米の大学で人格形成プログラム普及に貢献した、ライス元ジョージア工科大学体育局長よりライフスキル教育を学ぶ。

吉田良治さんBlog <http://ameblo.jp/outside-the-box/>